

コリアタウン 多国籍化

外国人1割時代

ルポ

地域から

5

職場は日本語助け合う

大阪市生野区の「コリアタウン」は、JR鶴橋駅南東の500メートル続く商店街を中心とする地域で、韓国食材や韓流スターのグッズを扱う約160店舗が並ぶ。年間200万人が訪れる観光スポットだ。

1920年代以降、朝鮮

半島から移住してきた在日コリアンがつくった「朝鮮市場」が始まりで、80年代、その子どもや孫となる2世、3世の経営者たちが「コリアタウン」としてPRし、にぎわいが生まれた。

街は今、多国籍化している。生野区によると、区内には約80の国・地域の外国人約3万人が住み、全住民の23%を占める。特にベトナム人は2013年の215人から3883人、ネパール人は24人から1586人と大幅に増えている。

■「見えない壁」

記者は7月下旬以降、コリアタウンに通った。

8月下旬の昼間に訪ねると元気な声が響いていた。

「お兄さんお姉さん、おいしいですよ」

キムチ店「成田商店」の



①コリアタウンのキムチ店では、ネパール、ベトナム、韓国の店員らが一緒に朝食を食べていた(8月27日)―前田尚紀撮影
②観光客が行き交うコリアタウン(いずれも大阪市生野区で)



店先で、観光客に呼びかけるアルバイターのネパール人、ワイバ・サジタさん(23)だった。店の奥では、ベトナム人の店長グエン・ニユー・ホンさん(24)が袋詰めを忙しかけていた。

ハさん(54)は約30年前、韓国から日本へ来て、在日コリアンの男性と結婚した。日本語が話せず困っていた時、周りの日本人が身ぶり手ぶりで必死に伝えようとしてくれてうれしかった。

一方で、店に立つと、「日本人の口に合わない」と言われ、悲しかった。「日本社会に近寄りたけれど、見えない壁があつてね」と振り返った。

「日本にきたばかりの人の気持ち、よくわかるから」と、7年ほど前からベトナム人やネパール人を雇い、「自分の国の常識を離れて日本のルールに従うのが大切だよ」と伝えている。

在日コリアンは日本生まれの2世以降を含め、就職

「関わることで わかり合える」

生野区で在日コリアンや他の外国ルーツの住民の調査を行う神戸女子大の川端麗子准教授(社会福祉学)は「生野区では、歴史的に外国ルーツの人たちが身近な存在であり、多文化共生が育まれてきた」と指摘。現在の日本社会は外国人を労働力として捉える側面が強く、共生からは遠いとし、「関わることでわかり合える部分がある。出合いの場となる『いくのコーライズパーク』のような場所が他にも増えることが多文化共生を考える機会につながる」と語る。

今回の連載で訪れた他の地域と同様、日本人住民は近年急増している外国人への関心が薄かった。

■低い関心

と返ってきた。ベトナム人は近鉄今里駅付近、ネパール人はJR桃谷駅付近に集まって暮らしている。それぞれコミュニティを築いていた。桃谷の集合住宅に住むネパール人の料理人、パンデ・インドラ・クマルさん(42)は自国の人以上と話すことがほとんどないという。記者の取材に答えた後、「こんなに日本人と話したのは初めて」と笑顔だった。

■対等な関係で

国籍を超えた「共生」は、一歩ずつ前に進んでいる。在日コリアンと日本人、中国、ネパールなど多国籍の住民らはNPO法人を設立。23年、コリアタウン近くの廃校に子どもたちのための交流拠点「いくのコーライズパーク」をつくり、学習を支援したり、おにぎりを作る舞ったりしている。

活動が続けるうち、子どもがここに通うベトナム人の親から「普段、お世話になっているから、おにぎりを握るボランティアに参加したい」と申し出があった。メンバーは喜んで迎え入れたという。同法人事務局長の宋悟さん(64)は手応えを感じている。「お互いできる範囲で助け合う。対等な関係を大切にしています」(平野真由、おわり)